

林龍二教授の退職記念号に寄せて

『コミュニケーション科学』の本号が林龍二先生の退職記念号になりましたことをうれしく思います。そのことに快諾していただいた林さん、研究委員の吉井博明さん、そして満場一致で退職記念号の発行を承認してくださったコミュニケーション学部のスタッフの皆様に、まずはお礼を申し上げておきます。

林龍二さんは東京経済大学にコミュニケーション学部が開設された1995年4月に赴任され、2011年3月に定年退職されるまで16年間勤務されました。コミュニケーション学部はインターネットが我が国に本格的に導入された年に開設されましたが、林さんはNTTでの現場の経験を生かし、「通信産業論」や「メディアビジネス論」の講義を担当されてきました。

また、コミュニケーション学部には開設当初から韓国や中国からの留学生が毎年一定数入学してきましたが、その学生たちを対象にした「書き方表現基礎」や「日本語ワークショップ」、そして「日本語表現」といった科目も担当していただきました。そのようなことから当然ですが、留学生の多くは林さんのゼミを履修するようになり、委員についても「国際交流委員」と「留学生指導員」を長い間担当していただくことにもなりました。

コミュニケーション学部の紀要である『コミュニケーション科学』は開設時以来、年2回の発行をほぼ達成してきています。25名前後という小規模の学部ですから、編集を担当する研究委員にとっては毎号、原稿が集まるかどうか不安の種になってきました。林さんは在籍中、『コミュニケーション科学』に数多く投稿されてきましたから、僕が研究委員をしているときなどは、掲載数を予測する上で確実な一本として計算できてとても助かりました。

ただ、申し訳なかったと思いますが、林さんご本人は論文としての掲載を希望したにもかかわらず、評論という枠組みのなかに入れざるを得ませんでした。学術論文には、いくつもの約束事があります。しかし、NTTから大学に転職なさった林さんには、その言ってみれば形式的で堅苦しい論文スタイルにしたがって自説を説かれることは好まれなかったようです。

形式に沿って書かれていない論文は論文としては認められない。こんな発想には僕自身も堅苦しさを感じてきましたが、他方で、コミュニケーション学部は1999年には完成年度を迎え、さらに大学院を発足させています。修士課程、そして博士課程で多くの学生が勉学をし、その成果を論文として発表するようになったわけですが、そんな学生たちには、まず、きちんとした論文のスタイルを教える必要がありました。形式にとらわれずに書かれた文章は内容如何に関わらず、評論という枠組みのなかにおさめざるを得ませんでした。ちなみに、僕自身も型にはまった文章を書くのは好きではないですから、『コミュニケーション科学』

林龍二教授の退職記念号に寄せて

に投稿してきた文章の多くは、評論や研究ノートというジャンルとして発表してきています。

『コミュニケーション科学』のバックナンバーを開きますと、林さんの関心が通信産業に留まることなく、日本と中国との関係、日本の政治や経済、そして社会の状況を「日本の本質」にまで掘り下げて連載されたもの、そしてリーマンショック以降の経済不況に対する日本の政府の対応を批判した「日本国家の決断」シリーズなど、きわめて多岐にわたり、また時事的な問題に絶えず関心を持ち、発言をし続けてきたことがわかります。

林さんに対しては、もうひとつ謝らなければならないことがあります。当初、送別会を年度末の最後の教授会終了後に予定していましたが、その日は3月11日で、教授会が終わった直後に大きな地震に襲われて、中止せざるをえなくなりました。教職員のなかには帰宅困難で学校で泊まった人や何時間もかけて帰宅した人がいましたが、林さんはどうだったのでしょうか。大学はその後、卒業式も入学式も中止にし、計画停電から新学期が3週間遅れることにもなりました。非常事態の慌ただしさに追われたとはいえ、送別会を夏休み前まで延期してしまったことはあらためてお詫びしておきます。

送別会の折にお話をして、研究活動などにもまだまだ意欲的であることをうかがいました。これからもおそらく、評論というジャンルにおさめさせていただくことになると思いますが、研究活動の成果を『コミュニケーション科学』に投稿し続けていただきたいと思います。コミュニケーション学部の開設以来16年間、学部の発展に尽力していただき、ありがとうございました。

2011年10月26日 コミュニケーション学部学部長 渡辺 潤